

韓国キリスト教会に関する対照民族誌の試み

秀 村 研 二

本研究は韓国社会の社会文化的問題をキリスト教会の対照民族誌的研究でもって解明してみようとするものである。キリスト教はその信者数の多さから韓国社会では大きな影響力を持ってきた。その宗教の社会的な影響力は、日本社会からは推し量ることが難しいが、韓国では政治的な力も含めてキリスト教の影響力は強い。そのキリスト教の社会文化問題をプロテスタント教会とカトリック教会を対照させることによって明確にしたい。対照民族誌については[本田 2019]を参照してもらいたい。¹⁾

1960年代からの高度経済成長とともに信者数を増加させたプロテスタント教会は、1990年代に入ると信者数の増加が止まった。一方でカトリック教会は1990年代に入ると信者数を増加させ2010年代初めまでその傾向が続いた。この信者数の増加にみられる対照的な動きが何を意味するのであろうか。そこには韓国社会が直面している問題が反映されていると思われる。その疑問を出発点として考えてみたい。

1. 韓国キリスト教に見られる特徴

はじめに韓国のキリスト教に見られるいつかの特徴について押さえておきたい。非西洋社会でのキリスト教の受容は宣教師による布教によってなされるのが多いのに対して、18世紀末の韓国(朝鮮半島)においてはそうではなかった。

当時の朝鮮王朝は、中華である清に対して朝貢し冊封される事大関係を結ぶことによって、中華世界に属していた。宗主国である清には使節が派遣されており多くの文物がもたらされていた。その中に当時中国で活動していたイエズス会の宣教師などが訳した漢訳聖書も含まれていた。朝鮮の支配層(両班などと呼ばれる士族)は漢学を教養としており、漢訳された聖書も西学の一部として読まれることになった。²⁾

そのような士族たちの一部が漢訳聖書によって信仰を得て、その中で燕行使の一員として北京に行った李承薫が1784年に北京で洗礼を受けた。これを韓国のキリスト教では自発的入信として、韓国教会史上で高く評価する。これはカトリシズム(天主教천주교)の受容の始めであったが、プロテスタンティズム(改新教개신교)も同様である。プロテスタンティズムの受容は1882年に満州で李盛夏など4名が洗礼を受けたことに始まる。1885年にアメリカから最初の宣教師が朝鮮に

やってきたときには、韓国語に翻訳された聖書の一部と教会がすでに存在していた。これもまた韓国の教会史では高く評価される。このような初期の自発的な入信（キリスト教の受容）から読み取れるのは、当時の知識支配層であった士族（両班）たちのキリスト教という信仰・信念への態度である。中華世界という文明の中で生きようとした彼らにとって、西洋からもたされたキリスト教も信ずるにたるものとして認識されたのである。

1-1 祖先祭祀との関係

朝鮮に受容されたカトリシズムは士族層を中心として、短期間に信者数を増やしていったが祖先祭祀をめぐる王朝から迫害を受けることになる。朝鮮王朝は儒教の中でも朱子学を国教としており、祖先祭祀を中心として受容されていた。当時のカトリシズムは祖先祭祀を偶像崇拜として禁止していたため、信者となった士族たちは祖先の位牌を廃し、祖先祭祀をおこなわなくなった。王朝政府は祖先祭祀をおこなわないことを王朝に対する反逆と見なして迫害をおこなった。そのため18世紀末から19世紀初めにかけて数度にわたる迫害で多くの信者が処刑されるようになった。なおカトリック教会では1960年代初めの第2ヴァチカン公会議以降は儒教の祖先祭祀を偶像崇拜に当たらないとして容認している。

祖先祭祀についてはプロテスタンティズムも同様であった。ただ受容された時期が王朝末期にあたり、迫害されることはなかった。祖先祭祀を偶像崇拜とみなすのはカトリック教会と同様であり、カトリック教会が祖先祭祀を容認した後も現在までそれは変わっていない。これによりプロテスタント教会は韓国の伝統文化の中心的存在とみなされてきた儒教的祖先祭祀と対立する存在とみなされたし、プロテスタント教会自身の自己認識ともなっている。それは一方では儒教を中心とする伝統文化に抗する存在ともなり、また一方では西洋文化や近代化を象徴する存在として認識されるようになったとみなされるだろう。

一方、韓国社会ではシャーマニズムが伝統文化として様々な局面において存在を示している。シャーマニズムは一般的には巫俗（ムソク **무속**）と称され、現在でも安寧を祈ったり、災いを祓ったりするムーダン（巫堂 **무당**）が活動している。伝統文化において儒教が社会实践規範の側面が強く、宗教性に欠けるのに対して、シャーマニズムはこの世の現実的な幸不幸に係わる民俗宗教（民間信仰）である。カトリシズムもプロテスタンティズムもシャーマニズムとは宗教性という面で親和性をもっており、様々な局面でそれが現れてくることになる。

1-2 近代文化需要の器

18世紀以降の非西洋社会ではキリスト教の受容は近代文明、西洋文化の受容をも意味する。前に述べたようにカトリシズムの受容は士族層からであった。プロテスタントが受容された19世紀末は、朝鮮半島が直面していた中国や日本との関係だけではなく西洋諸国との外交や政治的な困難から、特にエリート知識人である士族層には学ぶべき西洋文化の一つとしてキリスト教、特にプロテスタンティズムは立ち現れた。欧米の特にアメリカのプロテスタンティズムのミッションによる布教はカトリシズムより活発であり、学校教育（特にそれまでの社会ではおこなわれていなかった

女子教育)や医療などの活動を通して積極的に信者を獲得していった。

特にプロテスタントの比率が高かったのは朝鮮半島北部(現在の北朝鮮の地域)であり、これは朝鮮王朝時代に官職を得ることが南部に比べて低かった北部の士族層が新しい時代での生き方として新しい文化である西洋文化の習得を目指し、そのための信仰の受容であった点は否めない。³⁾そのため平壤(ピョンヤン)は東洋のエルサレムと呼ばれるほどだったという。

朝鮮半島では中華文化圏に属するものとして、書記文字としては漢字が優位であった。公の文書は全て漢文で表記され、士族層の通信にも漢文が使われるのが一般的であった。世宗代に創られた表音文字であるハングル(訓民正音)は漢字よりは下におかれ、知識人の女性たちが主に使うものであり、漢字が持つ公的性格に対しては私的なものとみなされていた。朝鮮への布教にあたってキリスト教は、カトリシズムもプロテスタンティズムも聖書の記述文字として漢字ではなくハングルを選択した。それは儒教的規範の中で男性よりも下位に位置づけられている女性たちへの布教を念頭においていたからであろう。西洋文化を自己のものにするためにキリスト教に接近した知識エリート(主に青少年)たちは、ハングルで表記された聖書をとうしてまた民族の文字としてのハングルに接することになっていったのであった。⁴⁾

1-3 反日という政治的性格

キリスト教、特にプロテスタンティズムへの入信には、近代文化の受容だけではなく政治的な目的のための接近もあった。

清や日本だけではなく、イギリス、アメリカ、ドイツ、フランスそしてロシアなどが19世紀後半になると政治的な意図から接近していた。そして最終的に日清戦争と日露戦争を勝利した日本が朝鮮半島を保護国とし、1910年には植民地とする。ところで19世紀から20世紀半ばまでの帝国主義の世界は、西洋列強による植民地獲得の争いでもあった。西洋列強は全てキリスト教を国教とはしないまでもキリスト教を主たる宗教とする国々であり、宣教師を布教のために多く派遣している国でもあった。つまり個々の宣教師がどれだけ自覚的であったかは別として、植民地支配と宣教活動とは一体化した表裏の関係でもあったのである。⁵⁾ところが朝鮮半島を植民地とした日本は非キリスト教国であった。ここに他の植民地とのずれが生じる。

19世紀末から20世紀初頭の国際情勢の中で、朝鮮半島に影響力を伸ばそうとする日本に対して西洋諸国が抑止力を及ぼしてくれるだろうという期待感を持つ人々がいた。その西洋諸国はキリスト教国であり、そのためキリスト教への政治的期待と近代文明への接近から入信する人々がいた。このため韓国のキリスト教、特にプロテスタンティズムには反日的傾向が見られるようになった。ここでいう反日とは反日本植民地主義の意味である。1919年におこった三一独立運動の主導者にもプロテスタントが多く、また運動自体が教会のネットワークを通じて全国に広がっていった経緯もある。

宣教師たちはこの反日という政治的傾向に対しては曖昧な態度である場合が多かったように見受けられる。日本の植民地支配への反対は持ちながらも、植民地主義自体には反対できなかった。それは彼らを派遣しているミッションの母国が植民地を持つキリスト教国であり、彼ら自身も福音の伝達という名の下に文明教化の使命を負っていたからでもあった。またプロテスタント教会は反日

の拠点になることも多く、神社参拝の強制に反対して多くの牧師や信者たちが投獄された。⁶⁾

1-4 分断状況の中で

1945年の日本の敗戦は朝鮮半島では植民地からの解放であった。しかし東西冷戦がはじまっており朝鮮半島は分断され、政治的混乱と経済的疲弊が続いた。38度線以南はアメリカ軍政が敷かれ、援助物資がプロテスタント教会をとうして配給されたこともあって教会に多くの人が集まった。またプロテスタント信者が多かった北部からは、共産主義政権のキリスト教弾圧のために多くの信者が38度線を越えて南に逃れてきた。この傾向は1950～53年朝鮮戦争とその後の混乱の中でより顕著となった。北から逃れてきた信者たちは大都市に住みつきそこで教会を再建していく。社会の混乱と経済的困難にあって不安を抱えた人々にキリスト教は希望を与えることによって信者数を増加させていく。これは都市部において顕著であった。

1-5 経済成長とキリスト教

1960年代なかばからの軍事政権下における経済の高度成長は韓国社会を大きく変えていった。工業化の推進によって労働者の農村から都市部への移住という人口移動がおり、都市化が進んでいった。労働者の多くは若く、伝統的な文化にさほど浸っている訳ではなく、新しい文物への憧れが強い世代の人々であった。彼らは都市という、それまでの社会関係から切り離された場で自己の居場所を見つける必要があった。その場所を提供したものの一つが教会だったと言えよう。特にプロテスタント教会にはそれが顕著に見られ、都市化の進展と共に信者数が急増していく。

儒教規範がまだ強く残っていた当時の社会では女性たちは下位に位置付けられ社会的な進出もままならなかった。都市に出てきた少女たちは、女性たちが社会的に様々な活動ができる教会に新しい価値を見だしていった。⁷⁾ また多くの似たような境遇の仲間たちに出会える教会は結節点としての役割を果たしてもいた。⁸⁾

高度経済成長期は機会を得た者が富を得ていくことが当然視された時期であり、個人は自己の能力によって競争的にそれを果たしていきこうとした。機会を見て良い職場に移動するので流動性も高かった。この点は日本の終身雇用を実現したことによる経済成長とは様相を異にする。プロテスタント教会もまた同様であった。アパート団地などが建設されると競争的に教会が建ち並んでいく。韓国のプロテスタント教会は教団よりも個別の教会の意志が重要視されるためである。このような新しく創られた教会を韓国では開拓教会と呼ぶが、その多くは自前の教会堂は持たず商業ビルに間借りをして始める。そして牧師の個人的才覚によって信者数は左右される。教会の生存競争なのであるが、その中で信者数を一定数得ると土地を購入して礼拝堂を建設していく。大きな礼拝堂を建てるとそれによってまた信者が増えていく。このようにして達成される信者数の増加を韓国のプロテスタント教会では教会成長と呼ぶ。以上のように高度経済成長と一体化してプロテスタント教会の信者数は増加していった。

カトリック教会は信者数によって教区(小教区)という地域が決まっておりそこには一つの教会(聖堂)しかない。神父も基本的には一つの教会に一人の司祭と信者数が多い時には数人の補助の

神父がいるだけである。そのために競争は起きず安定しているのだが、プロテスタント教会のように信者獲得を巡って競争的に参入することがなかったため信者数の増加は徐々にであり、プロテスタント教会のように顕著ではなかった。また前述したようにカトリック教会は祖先祭祀を容認するようになったため、容認しないプロテスタント教会を嫌って入信してくる人はあった。一方でカトリック教会はその安定性を生かして、社会福祉や医療などの活動を盛んにおこない、人々の共感を得ていったことは見逃せない。

大都市の富裕層が集まる新興のアパート団地には大規模な教会が出現してくる。信者数が1万人以上の教会はメガ・チャーチと呼ばれるが、ソウルの江南（カンナム）地域をはじめとして全国に幾つも存在するのが韓国のプロテスタント教会の特徴の一つでもある。ある特定の教会の信者であると言うこと自体がステータスになるという。周囲を威圧するような大きな礼拝堂はまさに経済成長とともに親和的に成長した教会の姿を体現しているとも言えよう。

1-6 民主化運動の担い手として

高度経済成長による急激な工業化、都市化は様々なひずみも生み出していった。特にそれが顕著にあらわれたのは劣悪な労働条件で働くことを余儀なくされた人々であった。当時の韓国の経済構造は安価な労働力による輸出に頼っていたからである。この人々のために活動する都市産業宣教会を初めとする進歩的教会は、労働者の集住地域での福祉活動、人権活動、労働者の権利獲得などの活動を行い、時の政権とは対立することが多かった。カトリック教会もまた、底辺に位置する労働者のための援助活動を地道におこなった。

1970年代以降、軍事独裁政権に対して政治の民主化を求める運動が活発化するがその中にはキリスト教信者が多数加わっていた。1973年の「韓国キリスト者宣言」や1976年の「民主救国宣言」がその代表的なものである。プロテスタント教会には、前述のメガ・チャーチに見られるような既得権を得た富裕層を中心とする政権との親和性が高い教会と、民主化運動に熱心に取り組む少数の教会、そして中間には政治的には無関心だがどちらかと言えば保守的な多くの教会がみられた。

一方でカトリック教会は民主化闘争に積極的に関与していくようになる。社会活動を多く行っていたこと、世界的にも当時のカトリック教会は恵まれない人々の抵抗を支えていこうとする傾向がみられたことも要因であろう。ソウルでの政権への抗議活動、民主化要求運動などの拠点にカトリックの明洞（ミョンドン）大聖堂が使われ、またデモの起点ともなっていた。

2. プロテスタント教会に見られる特徴

次に韓国キリスト教の対照民族誌の試みとして、プロテスタント教会の活動についていくつかの点を見ておきたい。私は1988年以来3つのプロテスタント教会を調査対象として韓国社会／文化の研究をおこなってきた。キリスト教会を韓国社会の一つの組織としてみることで、韓国の社会や宗教の在り方を考えたきた。以下、いくつかの点に絞って記述してみる。

2-1 調査対象の教会

まず調査対象としてきた3つの教会についてスケッチをしておく。延禧(ヨニ)教会はソウル市西大門区延禧洞に位置する、韓国キリスト教の最大教派であるイエス教長老会ハプトン教団に所属する教会である。1946年にまだ畑などが点在する地域だった延禧洞で、個人の家における家庭集会から始まり、1948年に礼拝堂を建て1949年になって初めて聖職者として伝道師を迎えることができた教会である。ソウルの市街地化が進むと共に信者数も増加していった。延禧洞は延世大学から程近い位置にあり、外国人学校も所在するため外国人も住んでおり比較的に高級住宅地と見なされる場所であるが、丘の上には庶民のための市営アパートもあり信者の社会階層は幅広かった。1988年に調査を始めた時には信者数は600名ほどであり、Y牧師と副牧師2人、女性伝道師2人が教職者として働いていた。Y牧師は年齢も40代と若く、説教も上手く人気があり信者数を1000名ほどまでに伸ばしたが癌で1994年に急死した。その後は数人の牧師が担任牧師となったが長く続かず信者数は横ばいのままである。

2番目に調査をおこなった教会は、ヨニ教会で副牧師をしていたK牧師が1992年に担任牧師として迎えられたソウル郊外の新都市イルサンの注葉(チュヨップ)教会だった。所属教団はヨニ教会と同じである。教会の歴史は古く1935年にアメリカ人の宣教師によって設立され、農村の教会として歩んできたが1980年代末にイルサン地区が新都市として開発されることになり環境は一変した。⁹⁾1993年に新都市の1期工事が終わり入居が始まると、教会は商業ビルの2階を借りて開拓教会のようにして新しい活動を始めた。歴史があり礼拝堂の建設予定地を持っていることが強みとなって信者数は増え続け、翌年には新しい礼拝堂の建築に取りかかり1995年には1期工事を終えて教会は現在地に移転をした。新都市で新しい住民の増加と共に信者数も増え1990年代後半には1000人ほどの信者数となった。

3番目に調査をおこなった教会は、前述の注葉教会で1990年代に末に起こったK牧師と長老たちとの対立に始まる。結局対立は解消されず2000年1月にK牧師は支持する信者200名ほどと共に注葉教会から分離して新しい教会(パロク教会)を商業ビルの2階を借りて創った。3年後の2003年には新しい礼拝堂をイルサン新都市郊外の田園地帯に建て教会名称もイエスロ教会とした。現在の信者数は300人ほどである[秀村2010a]。

この3つの教会は同じ教団に所属する教会であり似通った面もあるが、それぞれの教会が特性を持っている。三つの教会とも調査を始めた当初には集中しておこない、その後も継続して調査を続けており、定点観測のようにして変化を追っている。

2-2 教会運営

プロテスタント教会は諸教団はそれぞれに教義をもっており、また前述のように教団内の個別教会の独自性も強い。調査をおこなった教会は最大教派である長老派では教会の役職者として長老をおき、教会の最高意志決定は牧師と長老で構成される堂会(タンフェ)でおこなわれる。長老は信者によって、按手執事(アンスチプサ)の中から選ばれる。按手執事もまた信者によって一定の資格を得た信者の中から選ばれる。按手執事は堂会の下におかれる各種組織において中心となって活

動をする。長老も按手執事も信者数に応じて人数が決められているが、常に定数がみたまされているわけではない。

日曜日の礼拝（エーペー）が教会の中心であるが韓国の教会はそれ以外にも、日曜日の夕拝、水曜日の礼拝、金曜日の夜の祈祷会、それに日曜以外の朝に早朝祈祷会がある。牧師がそれらの宗教活動の中心になるが、ある程度の信者数以上の教会では副牧師や伝道師などがいるので分担しておこなう。日曜日の礼拝は牧師（担任牧師）がおこなう。

教会の運営は理想的には牧師と長老たちの意志が一致することであるが常にそうであるとは限らない。そして韓国の教会では牧師と長老との間で主導権争いが起こることが珍しくない。それはリーダーシップをめぐる問題でもあり、競い合うことを否定的に捉えないからでもある。韓国のプロテスタント教会には、「オーナー社長型」と「雇われ社長型」の二つの型があると考えられる。「オーナー社長型」は牧師が自己の能力と才覚で開拓教会を拓き信者数を増やした場合である。信者数の増加により長老をおくけれどもリーダーシップは牧師が握っている。一方「雇われ社長型」は牧師が長老たちに呼ばれて担任牧師になる場合である。長老たちに選ばれているので、よほどの能力がない限りリーダーシップは長老たちにある。

長老も牧師も自身の理想の実現のために政治力を発揮し、時には信者を巻き込んでの争いとなることがある。前述のヨニ教会は長老の力が強かったのだが、Y牧師の能力が高かく長老たちもそれを評価したため協力して運営に当たることが出来ていた。しかしY牧師の急死の後では担任牧師が3回替わった。それは牧師に対して長老たちが厳しい評価をし、牧師は長老たちとの主導権争いにおいて負けて出て行かざるを得なかった。つまりY教会は「雇われ社長型」となる。

注葉教会も歴史がある教会でK牧師は長老に選ばれて担任牧師となった。新都市に移ってから信者数の増加や教会堂新築などで日々の運営が忙しい間は牧師と長老たちは協力して運営できていたが、信者数が1000名に近づいた時に牧師が自己主張を強めたことにより長老と対立し、結局はK牧師が牧師を支持する信者たち200名ほどと共に教会から離れて独立をした。教会の分裂であるが、1960年代から80年代にかけて信者数が増加している時期にはよく見られた。またその分裂によって教会が増えたことにより、新たな信者の獲得にもつながっていたと考えられる。¹⁰⁾

そのK牧師が分離して創った教会がイエスロ教会である。信者は牧師支持者であったためリーダーシップはK牧師にあり、K牧師は注葉教会の退職金を原資として理念の実現させようとしており、現在までのところ大きな葛藤は起きていない。完全な形ではないにせよ「オーナー社長型」と言えよう [秀村2010b]。

2-3 信者の活動

信者の3分の2は女性であるが、教会運営の中心にあるのは長老と按手執事である。しかし日常的な活動の多くは女性信者たちによって担われてきた。特に韓国のプロテスタント教会の活動を支えたのが区域（クヨク）と呼ばれる組織であった。メガチャーチなどの大きな教会は別として、韓国の多くの教会は、所在する地域の信者が主に集まってくる洞内（トンネ＝町内の意）の教会である。教会は信者を地域別に10世帯ほど毎にまとめて区域とし、まとめ役として区域長をおいた。その区域長のほとんどは熱心な女性信者から選ばれている。毎週1回区域ごとに集まって区域礼拝をお

こなうが区域長がそれを主導する。また日曜の礼拝への出席の有無も区域長が確認する。区域のメンバーやその家族に関する情報も区域長から教会に知らされる。必要に応じて、牧師や伝道師は信者のもとに家庭訪問に行く。それを尋訪（シンバン）と呼ぶのだが牧師や伝道師はこれに多くの時間をとっていた。この尋訪は信者へのサービスなのだが、信者数の増加を支える一つの要因だったであろう。また区域は女性たちの交流の場所でもあった。特に結婚して子育てをしている女性たちにとっては、親しく様々な面でサポートしてくれる人々が得られる場所でもあった。

聖歌隊は信者の組織の中でも人数が多いものである。日曜日の礼拝をヨニ教会は3回、注業教会も3回、イエスロ教会は2回おこなっているが、それぞれの礼拝を30人から50人ほどの聖歌隊が担当する。集まって練習をするほか、会食をしたり時にはピクニックに行ったりもするので親しくなりやすい。前述のように農村から出てきた若い女性たちにとっては社会的活動を広げてくれる場でもあった。

2-4 伝統文化との関係

儒教の祖先祭祀については前述のようにプロテスタント教会は容認していない。そのために1990年代なかば頃までは、家族や親族が集まるソル（旧正月）や秋夕（チュソク＝旧暦8月15日）の茶礼や先祖の命日の忌祭祀（キヂェサ）の際に、信者而非信者との間で葛藤が生まれていた。特に嫁の立場の女性だけが信者である場合は非信者たちの中で孤立し辛い思いをしたという。

1990年代後半から韓国社会では儒教的規範が急速に影響力を失っていくので、儒教祭祀をめぐる葛藤も薄くなってきている。何よりも祖先祭祀のために家族や親族が集まる機会自体が減ってきている。そしてまたキリスト教信者が祖先祭祀をおこなわないということを社会自体が容認するようになってきている。しかしプロテスタントが祖先に無関心だった訳ではない。父母や祖父母に対しては、その忌日に家族で集まって追悼礼拝をおこなう信者が少なからずいた。位牌や紙榜（チバン＝紙に名前を書いた一時的な祖先の依り代）の代わりに夫婦の写真を並べ、讃美歌、聖書朗読、祈祷などをおこなう。供物は並べないが礼拝の後で家族で食事を共にする点など祭祀との共通点が多い。

プロテスタントの信者は祖先祭祀を容認しない点で自己意識としても他者からの見られ方からしても儒教と対立しているかのように自己認識している。しかし儒教には宗教的な側面は乏しく、実践規範的な側面が強い。信者も対立するのではなく日常生活においてはその実践規範に従って生きてきた。つまり祖先祭祀の一点だけが対立的に見られていたといっても良いであろう。

シャーマニズムとの類似も指摘できる。病気治しなどを専門的におこなっていた祈祷院の存在が注目されるが、それよりもこの世での幸福を願う祈福的な説教をおこなう牧師の存在や、祈福的な信者たちの祈りにも注目してよいだろう。また祈祷で特徴的なのは声を出して皆で個々の願いなどを祈る通声祈祷（トンソンキド）である。時に熱狂的にもなり、かつては金曜日夜の徹夜祈祷会で主に祈られていた。宗教には魂の救済を求め生きる指針を示す側面があるとともに、祈福的な側面もあることは否定出来ない。特に韓国のキリスト教が信者数を伸ばした要因の一つにはシャーマニズムとの親和性が高かったと言えよう〔秀村2012〕。

3. カトリック教会に見られる特徴

プロテスタント教会の対照とするのはカトリック教会である。カトリック教会は1990年代以降信者数を増加させ、1990年代以降で信者数を倍増させた。この時期にプロテスタント教会の信者数の増加は鈍化か減少傾向にあったので、カトリック教会の信者数増加は韓国におけるキリスト教の在り方における何らかの問題や韓国社会の変化を反映させているものと考えられる。調査対象としたのは、慶尚北道漆谷郡倭館邑（ウェグァン）に位置する信者数3000人の天主教倭館教会（聖堂）である。

1929年に設立されているが、カトリシズムが18世紀末に朝鮮に受容された後に起こった王朝政府による迫害の時に慶尚道にいた信者たちが逃れた地域がこの倭館の近くの山中であった。その後フランス人宣教師によって19世紀末に洛東江沿の洛山（ナクサン）に教会堂が建てられ（現佳室聖堂）、その後の信者数の増加によって分離されたのが倭館聖堂である。倭館地域はカトリック信者の人口に対する割合が全国平均の8%に対して倍の16%になっており、カトリック信者の比率が高い地域である。

3-1 教会組織

プロテスタント教会とカトリック教会には制度上、大きな相違がある。カトリック教会はバチカンの教皇庁を頂点とするピラミッド型で、統一的に世界中の教会が制御されることになっている。韓国は4つの大司教区に分けられ、倭館教会は大邱（テグ）大司教区に所属する。カトリックの個別の教会はまた神父（主任神父）を頂点としている組織である。しかし神父は教区の監督下にある。ところで倭館教会で特徴的なのは、一般的な個別教会の神父が教区に所属する神父であるの対して、倭館教会の神父は倭館に所在する聖ベネディクト会倭館修道院所属の神父であることである。その意味では二重の所属なのであるが、信者の大多数は修道院の神父の教会であることに誇りを持っていて、教区神父の教会ではないことを強調する〔秀村2018〕。

神父は教会の全てのことに権限を持っており、神父の指揮のもとに教会の運営がなされる。信者の代表は総会長と呼ばれ、神父が任命するが多くの場合は信者の推薦を受けてなされる。運営についての重要な事項は信者で構成するいくつかの組織を束ねる司牧会議で決められるが、最終的な決定権を握っているのは神父である。神父は協会運営に関しては独裁的な権限を握っているとも言えよう。しかし信者と神父との間に葛藤が生じる場合もないわけではない。信者には神父を替える権限はないので大邱教区の司教に訴えることになるのだが、倭館教会の場合は修道院のアップバース（大修道院長）になる。

しかし葛藤が起きたとしても信者たちは多くの場合は問題化しない。なぜなら神父は4年から7年ほどで移動するからである。プロテスタント教会の場合、牧師との葛藤が生じると信者は他の教会に移動すればよい。カトリック教会はその小教区には一つしかないのが原則的に移動ができない。それで信者たちは耐えて神父が移動するのを待つのである。ここにはプロテスタントの積極的傾向に対してカトリックの消極的傾向が表れているかも知れない。

教会では毎日ミサがおこなわれる。曜日によってミサの時間は異なる。多くの信者は日曜日のミサに出席するが、毎日のミサにも出席する熱心な信者も少なくない。プロテスタント教会の礼拝の中心が牧師の説教だとするなら、カトリック教会のミサの中心は聖体拝領（聖化したキリストの体であるパンを頂く）である。神父の話し（講論）もあるが5分から10分ほどで終わることが多い。またミサの準備は信者たちが全ておこなう。倭館教会には修道女会の分院がおかれて修道女が3人いる。1人は教会附属幼稚園の園長であり、2人が教会付きの修道女としてミサを初めとする教会の様々な活動につき指導をする。

3-2 信者の役割

教会にはさまざまな信者で組織される団体が存在する。聖歌隊もその一つであるが、カトリック教会ならではのものも多い。レジオ・マリア（レジオ・マリエ）という20世紀前半にアイルランドで始まり世界に広がった祈祷の会があるが、瞑想と祈祷をおこなう信者の団体である。倭館教会には20あまりのレジオ・マリアの団体があり、団体ごとで一週間に一度集まり祈祷と一週間の自己の活動について話しをする。1960年代に最初の活動が始まったが、修道院所属のドイツ人神父が導入したもので慶尚道の教会では早かったという。このように倭館教会には修道院の神父によって持ち込まれたものが多く、信者にはそれが教区の教会とは違うと意識を植え付けてもいる。

生活に困難を抱えている人を定期的に訪れて援助する団体もある。援助の対象とするのはカトリック信者だけとは限らない。金銭的な援助だけではなく生活全般に対する補助という側面が強く、メンバーが対象となる人の家庭訪問を定期的におこない相談に乗っている。カトリック教会の場合、全国的な組織であるので信者のこのような活動は教区で研修会をおこなって組織的におこなう強みがある。これも個々の教会の独自性を強調するプロテスタント教会との相違点である。

それがもっともはっきり現れているのが葬儀に関してである。倭館教会には葬儀を担当する団体がある。信者や信者の家族が亡くなると団員が出かけて行って葬儀に関することの全てをおこなう。そのために必要な研修を教区で受けており、団員の中には屍身を取り扱うための免許を取っている人もいる。亡くなると自宅、または病院の葬儀場に団員が行き死者のための祈祷（煉禱）をおこなう。¹¹⁾ 信者は聖堂での葬儀ミサを希望する人もおり、その場合も団員が中心となって準備をする。伝統的には葬儀は親族や地域社会が担ってきたが、都市化や社会文化変化によりその機能は1990年代に入ると失われてきた。カトリック教会の葬儀への取り組みは信者に安心感を与えており、カトリシズムへの入信のきっかけとなったと語る信者もいる。

別組織ではあるがマイクロファイナンスの倭館信用協同組合も倭館聖堂から始まった団体である。少ない出資金で日常生活に必要な金融機関として1968年に事務所を教会内において始まった。これもドイツ人神父が提案して始めたもので慶尚道では早かった。担保なしでの貸し出しで利便性が高く、多くの人が組合員となっている。また教会の口座もここにあり、信者の献金がまとまって入金されている。規模が大きくなると共に事務所は独立したが、総会は教会堂で長い間おこなわれており、教会との関係の深さをうかがわせる。2018年に創立50年の式典と祝賀会が開かれたが、会場は教会であった。

3-3 伝統文化との関係

祖先祭祀を容認したことについては述べたが、ソル(旧正月)と秋夕(陰暦8月15日)には祖先のために朝6時前に死者のための祈祷である煉祷が唱えられる。満員となった聖堂で30分ほど時間をかけて、祈禱文が節をつけて唱和される。聖堂の前方には信者が祀る死者の名前が貼られたボードが並びミサにおいて神父によって浄められる。ミサ終了後にはその紙を家に持ち帰り、家での祭祀の際の紙榜とする人々もいる。

祖先祭祀は容認されているが、同じ信者でも1960年代以前に信者になった人やその子孫は祖先祭祀が禁じられていた時代の信仰スタイルを維持し、儒教的な祖先祭祀はおこなわず祈祷をおこなう。そして祭祀を行う代わりに、ミサに礼物(献金)を献げて死者の名を読み上げて祈ってもらう。これをミサを捧げるという。近年は祖先祭祀を行うことが困難になってきたことを前述したが、信者たちはこのミサを捧げるということで代替し、また忌日には家族と一緒に食事をする傾向がみられる。

シャーマニズムとの関係もプロテスタントと同様に見られる。カトリック教会にはマリア信仰があるがマリアに対してこの世での困難の解消を願う信者が多くみられる。教会の敷地内にマリアの石像があり、聖堂内にもマリアの像があるが教会を訪れたらまずマリア像に祈ることが習慣化している人が少なくない。これは男性よりは女性に顕著である。

自動車を新しく購入した際には、自動車を神父に祝福してもらい安全を祈願してもらう。神父には霊的に特別な力があると考える人も多く、ミサの後に神父に自分の持っている十字架(ロザリオ)などを祝福してもらおうとする。ある神父は信者の中に祈福的な信仰を持っている人が少なからずいるが、それを排除することはあまり意味がなく、含んだものとして指導していくことしか出来ないと言った。

4. おわりに：対照民族誌の観点から

本論はプロテスタント教会とカトリック教会を個別で見のではなく、対照的に見ることによって個別では気がつかなかった問題にも注意を向けようとする試みである。プロテスタント教会とカトリック教会とは教義も違い、取り上げた個別の教会の状況も異なる。しかしキリスト教という外来の宗教文化が韓国という異なった文化伝統を持つ社会に根付いているという点では同じである。最後に最初の疑問、1990年代以降にプロテスタントの増加が鈍化し、カトリックが急増したことについて考えてみたい。

プロテスタント教会が信者数を急増させたのは高度経済成長との親和性が高かったからだと前述した。個別教会の自由度が高いプロテスタント教会は競争的に信者の獲得をおこなったが、それは個人の能力を発揮させることを評価する韓国の社会文化的な伝統とも親和性が高かった。儒教的な伝統の中で理念や論理の志向性が高いことも、プロテスタント教会のもつ聖書解釈の方法などとも共通性がある。

都市化、産業化の中で、特に故郷を離れて都市に集められた人々は成功することで自己実現をめ

ざそうとする。政治学者のグレゴリー・ヘンダーソンが朝鮮社会を渦巻型構造の中を個人が能力発揮しながら上昇していこうとする社会とみなしたように [ヘンダーソン 1973]、高度経済成長期の韓国社会は流動性が高く、幻想にせよ個人の能力によって成功できるとの希望を持てるとした社会であった。教会も同じで牧師の個人的な能力によって信者を獲得して成長できるとされた。大きな礼拝堂の建築がその成長の証しでもあった。牧師だけではなく長老に代表される信者たちも同様であった。教会という社会の中で、一般の執事(チブサ)から按手執事にそして長老にと階段を上っていくことが教会内のステータス上昇でもあった。一般の社会活動では成功しなくとも、教会では成功したいという願いもあったに違いない。それは大きな教会の長老であるということで一定の評価を得ることができたことにみられる。

一方、カトリック教会は前述のように競争的になる必要は無い。神父には養うべき家族もいないので家族のために貯蓄する必要もない。教会も信者数に応じて設置されるので、神父は信者数の増加に特に努力することもない。高度成長期のカトリック教会は安定はしていたがプロテスタント教会のような勢いを持つことはなかった。

それが1990年代になると韓国社会が急変する。1980年代末の金融危機(IMF危機)によって経済成長の神話が崩壊し、多くの企業が倒産し構造調整が一気に進んだ。これ以降韓国人の生き方自体が変わってくる。皆が成長できるとは単純に信じられなくなってしまった。その中で競争を続けて上昇を志向することに疑問をもち、それから離脱しようとする人々も出てくる。また成長よりは安定をめざす傾向もでてきた。

そのような変化の中で大型の教会堂を建てて競争を繰り返してきたプロテスタント教会が批判されるようになってきた。牧師の蓄財やスキャンダルなどもあり、プロテスタント教会に対して厳しい目が向けられるようになった。例えばこの時期に注葉教会ではK牧師と長老とが主導権を巡って教会内の葛藤が大きくなっていったが、それを嫌って多くの信者が流出した。プロテスタントの信者は教会を選択出来るので他の教会に行けば良いからである。教会が所在する地域では注葉教会は問題のある教会ということで有名になり、新しく入ってくる信者がいなくなってしまっていた。

カトリック教会の場合には、神父がこの世を捨てている存在であることもあり、信用度がプロテスタント教会に比べて高くなった。また前述のように福祉や医療などの活動を継続的に行ってきたこと、社会の底辺にいる人々に寄り添おうとする姿などが好感を持たれた。そのような点を人々が評価しだしたことから、高度経済成長期の競争が当然視された時期とは異なる生き方を人々が模索していることが表わされていると考えられる。そのような価値観の変化の中でカトリックの信者数が増えてきたと言えるだろう。しかし、その信者数の増加も終わり、これからの韓国のキリスト教は急激な高齢化社会に対処していかなければならない。それはもうカトリック教会では修道女の不足という形で現れてきている。これからの社会変化に対して、プロテスタント教会とカトリック教会がどのように対処していくかも問題となるであろう。

注

- 1) 本研究は JPSPS 科学研究費 15K03033 基礎研究 C「生き方の分化・再編と交渉に関する対照民族誌的研究:韓国社会の事例を中心に」(研究代表:東京大学本田洋)による研究成果の一部である。
- 2) イエズ会士を媒介として漢訳された西洋の思想、宗教、科学などは西学と称された。

- 3) 日本でも明治維新後に明治政府で官職を得ることが出来なかった旧幕府側の士族がキリスト教に入信した事例がよく知られている。
- 4) 開化期においてハングルは伝統的な中華世界から脱する意味もたされていた。
- 5) 人類学も同様に植民地支配に組み込まれていたことは言うまでもない。
- 6) 韓国のキリスト教史では反日の側面が強調されるが、大多数の教会や牧師、信者たちが実際に反日的行動をとったわけではない。
- 7) 聖歌隊の活動などはその際たるものであろう。讚美歌を礼拝で合唱するために集まって練習し、それだけではなく他のメンバーとの交流で社会が広がっていった。
- 8) 現在では多くの海外からの移民労働者が働く多文化社会としての韓国では教会がそれらの人々の結節点としての役割も担っている。
- 9) 新都市建設をめぐる注葉教会の動きについては[秀村 2001、2010a]を参照のこと。
- 10) 注葉教会はK牧師が分離した後に、他の教会と合併をした。韓国の教会では分離は珍しくないが合併は少ない。[秀村 2001]
- 11) 韓国では大きな病院には葬儀場が併設されていることが多く、病院での葬儀が一般化している[秀村 2007]

参考文献

- グレゴリー・ヘンダーソン(鈴木沙雄訳) 1973『朝鮮の政治社会』サイマル出版会
- 秀村研二 2001 「牧師と教会——韓国キリスト教の独自性——」三尾裕子・本田洋編『東アジアにおける文化の多中心性』風響社、pp.215-232。
- 秀村研二 2007 「韓国社会における死をめぐる民俗文化の変容：火葬の増加と葬儀場」『国立民族学博物館調査報告』69、pp.31-42。
- 秀村研二 2010a 「田園教会という選択—ある韓国キリスト教会の生き残り戦略」『明星大学研究紀要』(日本文化学科言語文化学科)18、pp.172-163。
- 秀村研二 2010b 「牧師と顔マダム」『韓国朝鮮の文化と社会』9。pp.235-239。
- 秀村研二 2012 「韓国プロテスタント教会の社会文化的特徴——社会変化の視角から」『韓国朝鮮文化研究』11、pp.16-36。
- 秀村研二 2016 「韓国キリスト教会における生き方の変化：プロテスタントとカトリックという生き方をめぐって」(特集 韓国社会の生き方：早期留学、改宗、農村移住)『韓国朝鮮文化研究』15、172-162。
- 秀村研二 2018 「ある文化財指定をめぐる」『韓国朝鮮の文化と社会』17、pp.173-179。
- 本田 洋 2019 「《特集》韓国社会の対照民族誌的考察」『韓国朝鮮文化研究』17、pp.134-133。
- 秀村研二 2019 「聖ベネディクト会修道院と韓国の一地域社会：韓国慶尚北道漆谷郡倭館邑への定着過程をめぐって」『明星大学全学共通教育研究紀要』1、pp.81-86。